『平家物語』の女人「出家」について

―横笛説話の「愛」をめぐって―

李　鮮瑛

はじめに

語り本系（覚一本）『平家物語』の灌頂巻の「龍女が正覚の跡をおひ、韋提希夫人の如に、みな往生の素懐をとげけるとぞ聞えし」という結びは、たしかに「出家」により平氏一門の菩提を願う建礼門院を通して、人間の救いを現したことは否定できない。しかし、そうはいうものの、物語（覚一本）において男女合わせて三九名に達する出家の様相が語られている中で、往生を遂げるという記述はそう多くはない。その中で、貴族社会の女人である二代后・祇園女御から白拍子である祇王・千手前らに至るまで、十四名に及ぶ女人の出家はどうであろうか。とりあえず、本稿では、「横笛」の女人造型を中心に検討してみていくことにする。

一

「忝く弥陀の本願に乗じて、五障三従のくるしみをのがれ、……九品の浄刹をねがへ」うという「六道之沙汰」（「灌頂巻」）の章段で窺えるのは、たしかに建礼門院という女人の往生ではあるものの、女院自身の口にする言葉において、「五障三従[1]のくるしみをのがれたいという、仏教的宗教観下の「女人」への制約がつきまとっている点は注意すべきである。そこには王朝時代以来の女人の劣機性が嘆かれているのである。『法華経』提婆達多品に「女身は垢穢にして、これ法器にあらず。……勤苦して行を積み、具さに諸度を修して、然して後、乃ち成ずるなり」とあり、女人の身の五つの障りを述べているのは周知のことである。これが女人の劣機性である。そこでいわれる「垢穢」とは、『法華経直談鈔』によると、

当時皆邪法ヲ教ル者共カ或ハ佛神ハ世ニ不スト御座教ヘ或ハ女犯肉食シタリトモ易々ト可ト成佛教タルヲ實事ト心得テ信頓可キ堕獄ス也[2]

という様に、救済を妨げる存在としかとられていない。これが垢穢とむすびつくのであろう。さらに、

取其衆生所々着ト云付テ着ノ事南岳法花懺法ニ云貪着諸色以着色故ニ貪愛諸塵以愛塵故受女人身世々生處或着諸色々懐我眼為恩愛奴故色使々我經歴三界矣依着執隨女人ノ身ヲ受恩愛奴ト可成見タリ又云貪着諸法犯還不了隨所縁境故起貪嗔癡如是邪念能生一切悪業所謂十悪五逆猶如猿猴亦如稿膠矣人ノ心ハ隨所縁ノ境ニ成着心ヲ事猶如猿猴ノ亦如稿膠也[3]

と、「女人」は貪着のゆえに三界を経巡る存在であり、この貪着は邪念を生ぜしめて、その十悪五逆の悪業のゆえに、執着深いものとしてあげられている猿・膠に等しいものだと説いているのである。

では、女人にとって貪着とは何であろうか。それを示すのが次の記述である。

次衆苦所悩亂ノ事付之ニ阿含經ニ見タリ過去遠々ノ昔一人ノ比丘有リ名弗知比丘彼僧有時深山居テ佛道修行スルニ烏鳩ト鹿ト口繩トノ四畜類有彼等一所ニ集テ互ニ我々ノ苦シ語ル也先烏云様ハ我ハ食ニ飢タルカ第一ノ苦也ト云ナリ次ニ鳩云様ハ我ハ婬欲ノ深カ苦也ト云鹿ノ云様ハ我ハ一切ノ物ヲ見テ怖ク思カ苦也ト云口繩云様ハ我ハ嗔恚カ細々起カ苦也ト云其時修行ノ比丘聞

此由ヲ云汝共カ苦ト云ハ非苦ニ々ノ源ト云ハ只愛欲也汝勿貪着愛欲ニ被タリ示去ハ倶舎論云愛是諸煩悩ノ足矣以愛欲ノ足ヲ諸煩悩ヲ起三界ニ流轉シテ諸苦ヲ受ル也末代ノ衆生モ苦厭シニハ先可捨愛欲ヲ也[3]

阿含経を引いて諸々の苦を述べたこの記述は、愛、つまり、貪着は煩悩の源で、それゆえに救済の対象を妨げられているという。これが、愛＝愛欲＝貪着ということである。

以上に見たように「女人」とは、劣機性という、男にくらべて劣っている機根の持ち主であり、そのもとに女人の愛欲が深くからまっているというのである。

本稿においては、この愛＝愛欲・貪着というモチーフをもって、愛欲にからむ女人「出家」として「横笛」説話をその例に上げて考えてみたいと思う。

二

女人横笛の「出家」を考察するためには、本文の中に横笛の感情が表われている「恨み」という言葉の意味を注意深く見てみる必要がある。

まず、その「恨み」という語が用いられている本文を示して分析してみる。

イ・…しかじ、うき世をいとひ、まことの道に入なん」とて、十九の年もとどりきッて、嵯峨の往生院におこなひすましてぞゐたりける。横笛これをつたへきいて、「われをこそすてめ、さまをさへかへけん事のうらめしさよ。たとひ世をばそむくとも、などかかくとしらせざらん。人こそ心つよくとも、尋てうらみん」とおもひつゝ、…

「横笛」説話のもう一人の中心人物滝口時頼は、「十三のとし本所へまいりたりける」が、建礼門院の雑仕である横笛を深く愛するようになる。しかし、「世になき物」と見くだされた横笛を思いそめたせいで、「世にあらんもののむこ子になして、出仕」させようとする父の望みとの間で悩み、それを善知識として、世を厭って出家する。そのような滝口時頼に対する横笛の感情を表したのが、（イ）の部分である。自分には知らせることもなしに出家してしまった恋人を、わざわざ尋ねてまで、恨み言をいわなければならない、この部分の横笛の「うらめしさ」とはどんなものであろうか。

その意味を把握するために、この章段の他の所で述べられている「恨み」の意味を先に見てみることにする。

ロ・「わらはこそこれまで尋まひりたれ。さまのかはりてをはすらんをも、今一度みたてまつらばや」と、具したりける女をもッていはせければ、滝口入道むねうちさはぎ、障子のひまよりのぞひてみれば、まことにたづねかねたるけしきいたはしうおぼえて、いかなる道心者も心よはくなりぬべし。やがて人をいだして「まッたくこれにさる人無し。門たがへてぞあるらん」とて、つゐにあはでぞかへしける。横笛なさけなうらめしけれども、ちからなう涙をおさへてかへりけり。

横笛はただ一度だけでも会いたいという願いをもって滝口を尋ねていく。が、滝口は代わりに人を出して、自分は会わずに横笛を帰す。この場合の恨みとは、その拒絶された、非情な相手に対するものであると解釈してよいだろう。この女の恨みに対して、滝口時頼の方も、

ハ・……あかで別し女に此すまひをみえて候へば、たとひ一度は心つよくとも、又もしたふ事あらば、心もはたらき候ぬべし。いとま申て」とて、嵯峨をば出て、高野へのぼり、清浄心院にぞゐたりける。横笛もさまをかへたるよしきこえしかば、滝口入道一首のうたをおくりけり。

そるまではうらみしかどもあづさ弓まことの道に入ぞうれしき

と、歌の中で、逆に、「恨み」といって答えている。横笛との愛をあきらめて、出家し仏道に励もうとしていた時、尋ねてきた相手の女、横笛が滝口時頼にとってどのような存在であったか。そのことは前の文の、「又もしたふ事あらば、心もはたらき候ぬ」の言葉から、十分推測できる。もしここで横笛と会ってしまえば、ひたすら仏道にうちこもうとしていた自分の心が「はたらき候ぬ」という、つまり、道心が乱れるのではないかという不安に気づいていたのである。それは、仏道の修行において、「女人」が心を乱す種になるということである。歌に表現されている滝口時頼の恨みとは、こういうことなのであろう。それゆえに「いとま申て」さらに深い高野に移ったのである。このような文脈から歌を解釈すれば、「（あなたが）出家するまでは、（仏道の修行に励む入道者の私にとって、あなたの存在が私の心を乱す種になるがため、）恨んでいたのに、（あなた）が出家して仏道に入ったことはうれしいことだ」という解釈が可能である。滝口時頼の恨みが、このように解釈されるとすれば、日本古典文学大系[5]の「私はあなたが髪をそって尼になるまでは悲しんでいたが、」という解釈、富倉徳次郎氏[6]の「私は出家するまでは憂き世を恨みもしましたが、」という解釈（水原一氏[7]、佐々木八郎氏[8]の解釈もほぼ同様）は、修行の妨げの存在であった女人の「出家」に対する歌の解釈としては不十分である。勿論、前後の文脈を考慮せずに、出家の歌として解釈するとしたら、よくありがちな出家の原因あるいは、その心情として「憂き世を恨」む、「悲し」むの意味で解釈していいのかも知れない。が、もしそうであれば、この歌は、前の「又もしたふ事あらば、心もはたらき候ぬ」という、心の動揺を恐れる滝口時頼の気持ちとはつながりを持たなくなる。「あかで別し女」を人にとりつがせて帰らせるという物語の筋から見れば、この歌は明らかに滝口時頼の心の動揺を恐れる気持ちを詠んだ歌である。この歌を通して考えると、「横笛」の説話は、また女が慕ってやってくることを恐れて、高野へと自ら身を避けようとするほど男の恨みがつらぬかれていると見るべきである。

ニ・横笛がかへり事には、

そるとてもなにかうらみんあづさ弓ひきとゞむべき心ならねば

それに対してこの歌にみられる横笛の恨みとは、愛する人とこの世を一緒に過ごすつもりだった女にとって、相手の男性がこの世を捨てて出家した、その結果にはそんなに恨むべきこともない、ただ、自分を捨てた、さらには自分というものがいるのに出家を抑えられなかった男、滝口の心が恨めしいという意味に取ることができる。

（ロ）～（ニ）を見てきて、（イ）を見ると、「われをこそすてめ、さまをさへかへけん事のうらめしさよ。たとひ世をばそむくとも、などかかくとしらせざらん。人こそ心つよくとも、」の場面で読み取れるのは、（ロ）の歌の中にも窺えるように、横笛は、斉藤時頼が出家したかどうかの、その結果にはこだわっていないという

ことである。立身出世がのぞまれる俗世への未練を絶ち切ろうとして出家する相手の男、滝口の行為は、横笛にはどうでもよい。しかし、滝口は女への愛までもそれと一緒に捨ててしまった。そしてそのことは、横笛という「愛（＝愛欲）」に生きる女にとって、女としての存在の根拠を否定されるのと同様であった。しかし、女の論理はさらに進む。それゆえに、「われをこそすてめ」と横笛が言うのは、相手が心変わりして自分を捨てることはいいとしても、それによって男が自分と同じように愛（愛欲）に生きることを自ら絶ち切ったのは「うらめし」いことであったのだ。横笛にとって、時頼も自分と同様な存在―愛に生きる存在―であることが願いであった。それゆえ、愛（愛欲）に生きることを絶ち切った滝口に対して、「人こそ心つよくとも」という端的な表現で、自分の恨みの心情を見せているのである。

三

覚一本において、横笛の「出家」の原因あるいは動機は、「愛」（愛欲）に生きる女としての存在感を否定されたためであった。横笛は男からみれば、救済の障害となる愛欲の存在として否定されたわけである。それゆえ、横笛は女としての身を捨てるために、「出家」を選んだと見ることができる。よくある後世菩提・極楽往生のための「出家」でなく、俗世での自分の女としての居所をなくした故、一つの方法としての「出家」であった。厭離穢土・欣求浄土というのが「出家者」に期待される姿であるだろうが、喜怒哀楽の感情を持つ人間にとって、その人間としての感情を切り捨てて欣求浄土、言い換えれば一向専修の姿に成りきることは容易ではないだろう。故に、我々は文学作品の中で、様々な「出家」の有様に接するのである。その「出家」を考える時、厭離穢土・欣求浄土の姿に成りきる、後世菩提・極楽往生のための出家を「積極的出家」というなら、横笛の「厭離穢土」ではあるものの「欣求浄土」の姿に成りきれない出家を「消極的出家」といってもよかろう。この二つの定義については今後の課題としてみることにするが、そのような「消極的出家」であればこそ、その思い（愛＝愛欲、貪着）は絶ち切れなかった。それ故その思いがつもり、ついに亡くなったのである。「よこぶゑはそのおもひのつもりにや、奈良の法花寺にありけるが、いく程もなくて、つゐにはかなくなりにけり。」の部分はこの横笛の存在の端的な現われであるといえる。

横笛の説話を通して、女人における「恨み」から「出家」への型を見てきたわけであるが、次にその物語を形成している横笛という女人造形のモチーフを考えてみる。冒頭で若干触れたが、ここで改めて、中世の仏教の中で女人の位置が、どのようであったのかを考える必要がある。『法華経直談鈔』[9]に、

…浄心誡勧ト云抄ニハ女人ノ十悪ヲ釈セリ一ニハ婬心無量也一得テ一望妻一人持モ又別ノ男ヲ見毎ニ望心在之是即婬欲強盛ナル故也二ニハ嫉妬ノ心如毒蛇ノ輿毒損面目三ニハ諂曲セウ対面シテ雖云ト物ソ念他ノ夫ヲ願遠行又対面スル時ハ言ハ和ニ雖物云ト内心ニハ望他人ノ妻ヲ有或我夫他行留守ノ間ニ活計シ遊山ヲモセント思也…

という女人の十悪を述べたところがある。父の命令と愛する女人との間で葛藤したあげくの出家ではあるものの、後には聖になった滝

口時頼という男性とは対照的に、まだ、女人救済の例の珍しい中世仏教の背景で、「横笛」の説話は、この女人の十悪の一つである「愛欲強盛」を持つ身として、救済の望みの薄い一女人造型であるといえないだろうか。

「平家物語」の中の一人の女人、横笛を通してみた「出家」からは、真の道心による「出家」の姿は見い出せなかった。というのは、男性の滝口時頼を見ると、「…いよいよふかくおこなひすましてゐたりければ、父も不孝をゆるしけり。したしき物どもみなもちゐて、高野の聖とぞ申ける。」という様に、完全に道心に入る。が、横笛の場合、その動機というものも「恨み」により、またその結果も「死」で終わる。覚一本において「死」で終わる横笛の「出家」が、救済ではないという論を立てるには少々問題があるだろうが、その「出家」が、女人としての身を捨てる手段に留まり、ゆえに「おもひのつもりに」よる死に往生が語られなかったことも事実である。冒頭で触れた女人の「劣機性」・「愛欲」に着眼して見るこの「横笛」の出家説話は、中世仏教の女人救済というテーマを色濃く映している点で、「平家物語」の女人の出家としては極めて特異である。

四

以上で見てきた「恨み」→「出家」→「死」のパタンが、延慶本・盛衰記・長門本ではどのように現われているかを次に見ていくことにする。

山下宏明氏[10]は、「横笛の「うらめしさ」を主題として、入道よりも横笛に力点を置」いた覚一本に比べて、延慶本は、「その目次の表題「時頼入道々念出来事」にふさわしく、入道の心の動きと、その行動を宗教的命題の側からとらえている」と述べられる。延慶本を滝口時頼の側から要約してみると、俗世の懊悩→俗念をうちかえしての回心（出家）→俗世からの誘惑（横笛）→俗世からの断絶（再出家）→高野入山するための山崎宝寺への移住という話になる。この場合、横笛という女は、たしかに、山下氏の言うように「滝口入道の再遁世の経過を宗教色濃く描」いているという見方にふさわしい、誘惑の存在でしかない。が、はたしてそれだけをもって、延慶本を滝口時頼を主とする物語としてまとめてよいものだろうか。氏は一方的に男の宗教的論理に視線を注いでいるが、横笛にも目を向けるべきではなかろうか。このような疑問を念頭に入れて、延慶本を、まず滝口時頼の方から見てゆくことにする。

時頼の出家を伝え聞いた横笛が、入道を尋ねていったところへ、入道が詠んだとする、

世ヲ厭ヒ浄土ヲ傾フ墨染ノ有繋ガニヌル、袖ノ上哉

という、他本にはないこの歌が、俗世—横笛—への未練という、入道者にしては、許されない問題を見せている。その「有繋ガニヌル、袖ノ上哉」にみせている未練は、進んで

滝口入道、破無ク思シ女ノ音ト聞ニ、胸騒ギ、書キ暮ラス心地シテ、馳リ出、見バヤト思ヘドモ、「サテハ仏ニ成ナムヤ。生死ノ紀綱ニコソ」ト心強ク思テ、弥返事モセザリケリ。

という、横笛が尋ねてきた場面にいたっては、心の揺れを外面に表出している。しかし、その葛藤の果てには、「サテハ仏ニ成ナムヤ。生死ノ紀綱ニコソ」と言いきって入道者としての姿を自覚する。その自覚によって、滝口は、

「誰故ニカ、ル道ニモ思入ゾトヨ。今世ノ対面不可有。有契者、

一蓮ノ上ニト祈給ヘ」

と、「心強」さ（非情）を一方で維持しながら、往生を願う入道者として、自らをあるべき姿に昇華して問題は解決される。さらに、横笛の訪れの後、往生院から山崎宝寺に居所を移しながら、「寂寞無人而、固ク閉空生之室、簞孤任意而、自ラ伴フ三楽之翁」と修行者の理想を願う境地にまで至るのは、氏の指摘の通り、「入道の姿勢を通して語る宗教上の問題」が提起され、そして克服される物語であるといえる場面である。

しかし、氏の覚一本と延慶本の対照による延慶本のとらえかたには、滝口という入道者の宗教的命題を強調したあまり、それと並行する「愛欲強情」の女人横笛が「出家」したというプロットにいかなるテーマがあるのかが看過されている。延慶本が「発心談にふさわしく、その宗教を前面に押し出すことで、きわめて宗教的に入道をとらえ」ることができたのは、逆に見れば、それほどまで滝口の相手、横笛に入道者の妨げの存在としての役割を十分に働かせているということになるのである。そのような役割を果たしたあげくの女人「出家」こそが、延慶本においては、重い課題になっていると見るべきである。

このような主旨から、あらためて横笛造型をみていくと、まず注目されるのが次の箇所である。

イ）ソヾロニ涙グミケレバ、横笛危ミテ、「何故カクハイタク塩折給ヘルゾ」トアヤシミナガラ、「イツトナキ言ノ葉ニハ、出仕ヲノミ物憂キ事ニ思給ヘル事ナレバ、サソノ一夜ヲ」ト思ケレトモ

ロ）横笛此ヲバ不知、絶ヌル夜半ヲ恨テ、「何ナル淵川ニモ投身バヤ」ト思ケル程ニ

ハ）横笛聞之テ

恨敷ヤ早晩カ忘レム涙河袖ノシガラミ朽ハハツトモ

ニ）今マデ御出家ヲ知ラサセ給ヌ事ノ心憂サヨ。如何ナル時、虎臥野辺エモ、蓬ガ柱マデモ、オクレジト契給シゾカシ。イツノ間ニ替ケル御心ゾヤ。

以上にあげたところは、覚一本では「恨み」という感情を中心に現われていた愛（＝愛欲）の横笛像と対応する部分である。「サソノ一夜ヲ」（イ）とか、訪れもない「絶ヌル夜半ヲ恨」（ロ）で、滝口に対する横笛の恨みの見せ付けとして「何ナル淵川ニモ投身バヤ」という心情や、あるいは歌の「恨敷ヤ」（ハ）、（ニ）の「如何ナル時、……イツノ間ニ替ケル御心ゾヤ」など、いずれも直接的な愛欲表現とみてよく、それによって、横笛を性的懊悩にたえない女人造型まで押し詰めている。ただ、次に示す箇所で、「愛欲」の横笛造型に揺れが見える。

ホ）縦一宇ノスマヒコソ不叶ドモ、谷ヲモ隔テ峯ヲモ連ネテ、互ニ善縁トモ成リ、一蓮ノ身トモ成ム」ト云モアエズ泣ケレバ

という様に、出家の意志を見せながら、愛欲の女人像は崩れていくのではないかと疑わしくなる。しかし、次の（ヘ）、（ト）の文脈との繋がり、そして今までの横笛造形との延長線上で見れば、その「互ニ善縁トモ成リ、一蓮ノ身トモ成」ろうとする願望は、何とか滝口と同じところで過ごしたいという、方便としてのものであることがあきらかになる。少なくとも、「今世ノ対面不可有。有契者、一蓮ノ上ニト祈給ヘ」と、心の動揺を抑えながら、お互いの浄土を願う滝口入道の気持ちとは、次元が違うということが断定できる。

へ）是マデ奉尋タル無甲斐モ、ウタテクモ閉篭給ヘル御心ヅヨサカナ。人ゲニサモ無リケル物故ニ、吾身一ニカキクレテ思心ハ、何カ計女ノ身程ニ心憂物ハナシ。

この「女ノ身程ニ心憂物ハナシ」というのは、源氏物語等の王朝時代の女の言葉としてよくみえる、女の身を嘆く常套的文句[1]である。しかし、五障三従の劣機の身のか弱い女の嘆きではなく、滝口人道の「心強」さ（非情）のせいで、愛欲の思いをはらすはけ口を失ってただ一人で悩む、というのがここでの「心憂」しということである。自分の思い悩みさえも、出家した相手のせいにするこの部分の横笛の姿は、これまでの横笛像によってつらぬかれている。このような横笛像からすると、奇異に思われるのが次の彼女の突然の出家である。

ト）恨ノ涙セキアエズ、押ル袖モ露ケクテ、自ラ髪ヲ押切テ、庵室ノ窓ニ投懸クトテ

剃ルマデハ浦見シ物ヲアヅサ弓誠ノ道ニイルゾウレシキ

時頼是ヲ聞テ

ソルトテモナニカウラミムアヅサ弓引留ムベキ心ナラネバ

「自ラ髪ヲ押切」って出家する行為は、激情のほとばしりとして、屋島沖から身を投げた小宰相に殉じた女房の例などにみられるが、その「押切」った髪を相手に「投懸く」という出家行為はめずらしい。横笛が「押切」った髪を「庵室ノ窓ニ投懸」たという異様な行為に着目して、名波弘彰氏[2]はここでの横笛の行為が、もともとは出家作法としての剃髪でなかったのではないかと疑って、出家竄入説を考えている。それによると、まず切った髪を「庵室ノ窓ニ投懸ク」というのは、その髪を時頼入道に捧げたのではないかという。それに似た例としては、

タガヒニ志深キ女房ニ、ワカレシ事悲ク覚ヘケリ。其ノ比ノ入唐ノ人、安穏ナル事マレナリケレバ、ワカレン事ノカナシサニ、中カタカヒタルヨシヲセント思テ、フミヲカキテ、女房ノ小袖ノツマニ入テ、コレヲ見出シテ、恨ミタル由、已ニ、唐船ニ乗テ、コギ出シテケリ。船ハルカニ、ヲシイダシタリケルニ、小船ニ人両三人乗テ、イソギヨセケリ。ミレバ、カノ女房ナリ。云事ハナクテ、タケナリケル髪ヲ、モトイノキワヨリ、オシキリテ、唐船ニナゲ入テ、軈テコギモドシテケリ。（『雑談集』[3]）

我ガヒタイノカミヲ切（リ）テ、彼（ノ）妻女ニトラセ、彼ノ妻ノ髪ヲバ我（ガ）マボリニ入（レ）テ頸ニカケ、（「博多日記」梶原正昭『軍記物語の一基盤』所収[4]）

という例が上げられる。このことについて名波氏は、この後者の例に似た民俗は沖縄県にもみられる。すなわち、男が旅立ちする場合、その身内の女性、主として妹とか従妹などの毛髪を袋に入れて携える。そうすれば、道中の安全がたもたれると考えられたという。このような例からして、前者の例やそして横笛にみられるような女が髪を押し切って捧げる行為は、相手に身も心も捧げる行為であったといってよいのではなかろうかと考えておられる。高取正男氏[5]も、女人の髪についての民俗にふれて、「女がその命である髪を切って神前に捧げたら、身も心も神に捧げたしるしとされた。夫が死んだとき、妻が髪を切って夫の棺に納めるのも、神の妻となる行為で夫との二世の契りを表そうとした」と述べておられる。

延慶本の横笛の奇異な行為を出家とは程遠い行為であると述べ、

歌による「出家」の竄入とみる名波氏の見解は興味深い。というには、延慶本においての出家竄入の過程を検討しなければならないが、延慶本の横笛造型は、この出家のプロットをはさんで入水を遂げるのである。その辞世歌に「恋シナバ」と詠む以上、明らかに恋の懊悩による身投げであって、それは前の「愛欲強情」の人物像に直接つながることである。その間に自省による出家というモチーフがはいり込むことは、きわめて不自然である。これには、氏のいうごとく、竄入説に傾かざるをえない。

覚一本では、「剃ルマデハ」の歌が時頼、「ソルトテモ」の方は横笛となっているが、延慶本は詠み手が逆になっている。延慶本における横笛の歌は、「私が髪をきって出家するまでは（つらい仕打ちをなさるあなたのことを）恨みに思っておりましたが、こうして真実の仏道に入ってみると（そうした恨みも消えて）まことにうれしく思います」と、解釈できる。この突然の出家歌の「剃ルマデハ」と、前の「自ラ髪ヲ押切」るという行為が照応して、横笛の出家という延慶本の作意が生まれたのではないだろうか。その作為の故、滝口の「あなたが髪をきったとて、どうして私が恨みに思いましょうか、私にはあなたの出家を引きとどめる気持ちはありませんから」の返歌には、滝口入道が改めて「引留ムベキ心ナラネバ」と詠む、この場面にそぐわない不自然さがある。

かつて神野藤昭夫氏が、『平家物語』諸本の横笛の話を

①横笛の死には言及しないもの（源平闘諍録）

②横笛は出家してやがて死んだとするもの（出家タイプ—覚一本・屋代本・八坂本・中院本・百二十句本・平松家本・葉子十行本の語り本系と南都本）

③入水したとするもの（入水タイプ—長門本・盛衰記・延慶本・四部本・南都異本）

と、三種に分類したことがある[10]。氏は、吉田経房の『吉記』にも見える斉藤滝口時頼の出家遁世という「核としての史実」が『横笛草紙』を成り立たせるまでは、平家物語諸本の本文変化の段階を踏まえていると述べられ、その段階の展開を①→②→③というふうに「系列化」しているのである。しかし、本稿では、氏の述べられているようなその段階の展開よりも、前章まで見てきた通り、横笛という女人像が出家タイプと入水タイプにおいてどのような特徴をそれぞれもっているのか、そしてその特徴によって出家タイプにおいての「出家」の意味を考えてみる。またその諸本の対応はどのような意味をもつのかを見ていこうとする。ところが、これまで検討してみた延慶本は、出家して入水するという、他本には見えない特色をもち、神野藤氏も一応「折衷タイプ」と述べられてはいるが、横笛像のモチーフという面からみれば、もともと入水タイプの筋で物語は成り立っていたのではないだろうか。ただ、救いのない「愛欲」の身のままで入水に至らせるには、あまりにも苛酷であったのだ。それ故、「自ラ髪ヲ押切」る行為を「出家」と結び付けることで、横笛を救済に至らせたのであろう。このような仮説に対しては、次に見える入水場面が参考になる。

チ）「如何ナル男ナレバ、吾故ニカヽル道ニモ思入ゾ。イカナル女ナレバ、憂世ニナガラエ、心ニ物ヲ思ラム。

恋シナバ世ノハカナキニ云ナシテ無跡マデモ人ニ知スナ」

トテ、此川ニ身ヲ投テ失ニケリ。

身投げをもって、滝口入道の出家に対応した、横笛の感情のもつ

れは、どのように解かれていったのか。入水の直前の「恋シナバ」の歌で、横笛の感情をいろいろな角度から解釈することが出来る。自分の恋い死にを知らせたがらない理由の一つには、次にあげるような背景があった。

親の諫を背かば不孝の身になりぬべし、従はゞ又あぢきなし、女の思ひをかうぶれば、五障三従の罪深しと思ひ切りて、生年十八の年俄にぼだい心を起し嵯峨なる所にて出家して（「長門本」　巻十七）

餘りに人の心強きも身の仇となりぬらめ、此世には親り青き鬼となりて身を徒らになし、獨なさけなき事にあたり、後世迄もさはりとなりて、世々に身をも鬼となして何かはせん、繫念無量劫とかやも罪深し（「長門本」　巻十六）

「夷心の分く方なくて恋ひ死なば、長き世の御物思ひとなるべし。天竺の術婆加、后を恋ひ、思ひの焔に身を焦がしける例、おぼし知らずや」（『俵藤太物語』⑫）

「恋には人の死なぬか、扨もむなしく恋死なば、一念五百生、堅円無量劫、生々世々の間に、つきせぬ恨の深ふして、俱に蛇身となるならば、仏にはならずして、邪道に長く落べし」（舞曲『大職冠』⑬）

この滝口の入道の場面、小宰相の身投の場面の文脈、以下二つの例で分かるように、恋死—又は、恋の思いをかぶらせる—という女の執着（＝遁着、愛欲）による、怖れるべき結果の故であろう⑭。これは、『平家物語』の「横笛」章段を通して形成された、御伽草紙『横笛草紙』に、「女の心を破れば、一念五百生、繫念無量劫の罪たるべし」という筋に受け継がれていることからも言える。二つには、仏教において、自ら命を絶つ自殺という横死は、鎮魂を弔う儀礼を要するため、そのわずらわしさを滝口入道にかけたくないという気持ちも考えられるのである。三つに、討死・自殺・刑死などの「死」を「敗北の表現」である⑮とする言葉を借りて言えば、「憂世ニナガラエ、心ニ物ヲ思」い続ける生に耐えられなくて選んだ、「敗北」（＝死）の惨めさを見られたくないという心情があるのではないか。これが、「如何ナル男ナレバ、吾故ニカヽル道ニモ思入ゾ」と、身投げの瞬間まで恨みを言っている横笛の状況と、「出家」の場面の前までの激しい愛欲の横笛像と一貫しているとは言えるが、一・二の解釈の可能性を排除してまで断言することはできない。

以上、延慶本における横笛造型を見てみたが、そこには、覚一本で見た横笛造型をはるかに上まわる激しい愛欲の—直接には、性的懊悩にまで進んでいる—女人造型として描かれている。従って、延慶本における横笛を「恨みの一方でむしろ相手の道心には及び得ない自らを省みる横笛」という⑯、山下宏明氏の見解もあるが、以上の考察を通じて、「自らを省みる」横笛造型とは思えない。本稿からみれば、氏のいう「宗教的命題の側」からする、滝口入道の物語という結論には同意できないが、宗教的立場をまもる滝口に対する妨げとしての存在、すなわち「愛欲強情」の女人像を通した、男性の論理からとられた物語であるとは言える。名波氏が説かれるように竄入という型ではあるものの、「出家」という救済への希望を女人「横笛」に与えたことが、逆にいえば、延慶本の特色であるともいえるのではないか。

五

では、盛衰記と長門本での横笛は、どのように造型されているのだろうか。ただし、両本はほぼ同文の物語と認められるので、本章では長門本を中心にして考えることにする。

嵯峨なる所にて出家して、往生院と云所に行ひすましてありけるに、横笛此由を知らずして、とばれぬ事をかなしみて、滝口が年頃申むつびし三條にいたりて、滝口殿はととひしかば、返事はなくて扇を一本なげいだす、一首の歌あり、

そるまでも頼しものをあづさゆみ誠の道に入ぞうれしき

と書たるをみてこそ、滝口出家してけれと思ひて（「長門本」）

覚一本の（イ）、延慶本の（ロ）と対応するこの部分から、出家タイプ（延慶本は、出家→入水ということで、折衷タイプと命名されてはいたが、前章の検討から出家タイプに入れられる）との対照が現われる。盛衰記にも、波線の部分と対応するものに、「只假初の契かや、移れば替る心かと、獨思に焦れけり」「昼は終日に思くらし、夜は八聲の鳥と鳴明す」「呉竹の夜ごとに物が思はれて」とある。そこには、「愛欲」の女人像を受け継ぎながらも、「何と成べき我身やらんと、朝夕歎けるこそ哀なれ」という心中思惟語のあることが注目される。これによって、覚一本・延慶本にみられた激しい「恨み」の横笛像が、「悲しみ」や「哀れ」にうちしずむ「嘆き」の女人像に変わっていることが分かる。

や、久しく有て、御行衛を知らせ給はぬ事は、いかなる御こゝろづよさとや、虎伏すのべ蓬が袖なりとも、おくれじと契り給ひし事は、さながら僞にてありけるものを、されども昔のよしみ忘れがたくて、是まで尋ね参りたり、一蓮の身ともならんといひもあへず、—（中略）—せめては今一度御聲なりとも聞させ給へやといひけれども、深くとぢ篭りて一言葉の返事もせざりければ、女恨みて、時雨にそむる松だにも、かはらぬ色はあるものを、後の世までと契りしに、早くもかはる心かなとて、袖をしぼりつゝ歸にけり（「長門本」）

出家のことを自分に知らせてくれない、尋ねて行っても返事さえ聞かせてくれない滝口の強情・かたくなまでの「恨み」を見せる筋は、覚一本・延慶本と同様である。しかし、延慶本の横笛の言葉に窺えた、同じ文句の「一蓮の身ともならん」の文脈からは、延慶本とは違って、それを誠の仏道を願う気持ちに転換させていることが読み取れる。盛衰記の対応する部分は、「させる妨に成まじ、我故に貌をやつし給へると承れば、今一度墨染の姿を奉見、又便あらば、自も苔の袂に栽替て、花を求め香を焼、共に後生を助らん」という自己反省と、「憂身の程もあらはれて、今は人を恨に及ず、」という「恨み」の克服という様に、「恨み」の克服→自省→「共に後生を助」かるという、宗教に近づこうとする横笛造型を描きだしている。修行者の妨げにはなってはいけないという自己反省から、次の歌にみえる「眞の道に我をみちびけ」と祈る女人像への展開には、出家タイプの説話の横笛造型には見られなかった新鮮さがある。

さすが明行空なれば、人のためつゝましと思つゝ、

山ふかみ思ひ入ぬる柴の戸の眞の道に我をみちびけ

と讀棄て、行潜たりける朽葉色の衣をば柳の朶にぬき懸、思ふ事共書付て、同じ枝に結置、歳十七と申に、河のみくづと成けり。（「盛衰記」）

さて横笛法輪寺をばよそにみて、梅津の里へと行しが、かゝるうき世に存へて、何にかはせんと思ふに、たゞし思おく事とて

は都に老たる親一人、それも佛道なるならば、などか迎へに取ざらんと思ひて、さつた王子のうへたる虎に身を投げ、生年十七と申に、底のみくづとなりにけり（「長門本」）

この部分を通じて、延慶本・覚一本と対照される盛衰記・長門本の横笛像の特徴が、明確に分かる。憂き世に「由なき物を思」う自分の身を嘆いて入水するものの、その死は横笛にとっては、出家に代わるものであった。彼女は明らかに、入水往生を信じて身を投げるのである。と、いうのは、「佛道なるならば…」という、成仏後の還来穢土の本願という仏教的孝養観が明確であって、入水往生への意志を見せているからである。盛衰記においても、「恨み」の解消といえる「人のためつゝまし」という心情と、「眞の道に我をみちびけ」の念願をもって、浄土を願う純粋な気持ちによる入水となっている。しかし、出家もせずに、入水往生と横笛が信じえたこの背景には、何があるのか。それを語っているのが、横笛の死に対する滝口入道の行動である。

みづからたき木を拾ひ、栴檀の煙りとたき上げ、空しく骨をひろひ、都の遷り猶妄念もこそおこれとて、高野へ上て奥の院に行ひすまして（「長門本」）

のように、滝口入道が、延慶本や覚一本には見えない横笛の遺体処理や葬送儀礼を果たしているのである。この件は盛衰記にも、

法輪近き所にて、入道此事を聞、河端に趣、水練を語て淵に入、女の死骸を潜上、火葬して骨をば拾ひ頸に懸、山々寺々修行して、此彼にぞ納ける

と、同じように見える。それは、そのような宗教的職能をもち、死後の霊魂を管理する高野聖を描く表現なのである。恋に破れた「恨み」の女人像は薄められ、「嘆き」のうちに生を閉じるにあたって、往生を願望する横笛の入水を高野聖滝口が弔うという話の展開は、高野聖を浮き彫りにするいいプロットととるべきであろう。これに関しては、物語を遡って考えてみると次の箇所が注目される。

滝口があんしつと覺しくて、柴の庵を引結び、（中略）法華経の提婆品をよみて居たりけり（「長門本」）

という、横笛が入道を尋ねた箇所であるが、同じく盛衰記に、「門の中に、法華経の提婆品をよむ聲しけり。いと奇く立聞ば、若有善男子善女人、聞妙法華経提婆達多品、浄心信敬不生疑、（中略）心佛及衆生、是三無差別と云華厳経の文を、くり返二三返をぞ唱へたる」という様に、経文が読まれている。覚一本の「念誦の聲しけり」と、延慶本の「世ヲ厭ヒ」の歌とは対照的に、「法華経の題婆品」と言っているのは、何を意味しているのか。これをもって、往生を信じながら入水した横笛に対する、滝口の高野聖としての職能の伏線とみてもいいのではないか。つまり、このような繋がりによって、盛衰記と長門本は横笛の入水往生を語ったのである。これは、極端にいえば、盛衰記・長門本は、死後の弔いによって、被葬者の救いが望めるという、高野聖の役割を浮き彫りにするため、横笛の出家のモチーフをもたないストーリーを成しえたという見方も成立するのである。そこにはまた、横笛の「恨み」の女人像が薄められ「嘆き」の女人像になることによって、「女人の恨みを負った」という汚点を免れた滝口造型の、理想的な高野聖の造型を意図した姿勢も読み取れる。以上からいえば、長門本の「横笛」説話は高野聖の物語であった。その入水が、恨みをのこしたままで横死にとどまる延慶本とは対照的に、入水往生を望むことができる横笛像を生みだし

たのである。

〔注〕

（1）この五障とは、『法華経』提婆達多品に、「女人の身には猶五障あり、一には梵天王となることを得ず、二には帝釈、三には魔王、四には転輪聖王、五には仏身なり」とある。
（2）栄心著、『法華経直談鈔』第3本。臨川書店刊（三八七頁）
（3）前掲（三八九頁）
（4）前掲（四四一～四四二頁）
（5）日本古典文学大系（岩波書店『平家物語』下、二六九頁、注三〇）
（6）水原一氏（新潮日本古典集成『平家物語』下、一七二頁、注一）
（7）富倉徳次郎氏（角川書店、『平家物語全注釈』下巻（一）三〇一頁）
（8）佐々木八郎氏（明治書院、『平家物語評講』下、一二七〇頁）
（9）栄心著、『法華経直談鈔』第七本。臨川書店刊（五二九～五三一頁）
（10）山下宏明氏『平家物語の生成』　明治書院。昭59（三二九～三三三頁）
（11）『源氏物語』から例をひくと「心憂き身」（「浮舟」）、「[我が]身のみぞ、いと心うき」（「紅葉賀」）などがあげられる。
（12）名波弘彰氏「延慶本平家物語横笛説話における出家と入水」（未発表）
（13）「中世の文学」所収『雑談集』巻六、三弥井書店（二〇九頁）
（14）『博多日記』（梶原正昭氏『軍記物語の一基盤』所収、四四頁）
（15）高取正男氏、『信仰の風土』著作集1、法蔵館、昭57（一五四頁）
（16）神野藤昭夫氏、『日本文学』昭52、6「横笛草紙の成立まで—室町時代物語論のために—」
（17）『俵藤太物語』、新潮日本古典集成「御伽草紙」所収（一三三～四頁）
（18）笹野堅氏、幸若舞曲集『大職冠』臨川書店（四十頁）
（19）自分の恋死を、相手に隠そうとする行動の解釈を、繋念無量劫の罪を相手に被らせたくない故だという論は、名波弘彰先生の筑波大学大学院の平成三年度「文芸思潮特殊研究」の授業において、ヒントをうけた。
（20）『湘南文学』第7、（昭48、3）「平家物語における敗北の表現（続）—討死・自殺・刑死を中心にして」
（21）前掲論文

（筑波大学文芸・言語研究科学生）